



the most advanced...

幅広い知識を組み合わせることで 肺線維症とがん免疫、 2つの異なる領域のトップランナーに

大学院医歯薬学研究部 医学域 教授

西岡 安彦 (にしおか やすひこ)



西岡先生は全国の医師が「自分の家族に治療が必要になった時に診てもらいたい医師」を選ぶ「ベストドクターズ」に8年連続で選出されました!

研究者では珍しい 2つの領域を研究

西岡先生のラボでは呼吸器疾患とリウマチ膠原病疾患を扱っていて、研究グループとしては肺線維症、がん免疫、喘息、リウマチの研究グループがあります。その中でも力を入れているのは、肺線維症の研究とがん免疫の研究です。西岡先生は教授になる前にがん免疫の研究を10年間、肺線維症の研究を10年間としたという経緯から、この二つを主とした研究が進んでいるのだそうです。

「ふつうはどれか一つの研究に絞って行うので、僕も教授になった時にどれか一つにしようかなと思っただけですが、二つの領域をこんなに一生懸命にやっている人は誰もいないだろう、と。せっかくだから両方とも頑張ってみようと思っただけです。」がん免疫の研究を肺線維症の研究にいかし、肺線維症の研究をがん免疫の研究にいかすということを相互に繰り返すうちに、それぞれの領域で最先端に近づいているかともいいます。

この二つ、関連性や類似性があるかといえば、「あまりない」という西岡先生。それぞれ別々の研究を繋ぐ成果の一つが線維細胞(Fibrocyte)という細胞の研究だそうです。線維細胞は肺線維症の領域ではメジャーな細胞ですが、がん研究ではノーマーク。あるとき肺がんの薬剤耐性メカニズムについての研究を行っていた際に、線維細胞が関係しているかも...ということが分かり、この閃きが功を奏し、研究結果は学術雑誌『Nature Communications』に掲載されました。「それぞれの領域で関心を集めるものは意外と限られているので、ある領域では『誰でも知っている』というものも、別の領域では『誰も知らない』というケ-

全国から研究者が集まる 希少な研究を行うラボを 目指して!

二つの領域で活躍してきた西岡先生ですが、最近、どちらかにウ

エイトを置いた新しい試みに踏み出そうとされています。「臨床の教室なので、人に役立つものを何か残したいっていうことを誰しも思うんですよね。そうすると臨床研究が必要になるんですが、臨床研究ってすごい労力がかかるんですよ。臨床研究を本気でやりますよ、基礎の研究に時間を割けないくらい、時間を費やすことになっちゃうので、ここに踏み

出すとしたら、どちらかに絞った方がいいかなと、考えています。それが中途半端で終わるか、それなりの成果が出るかは紙一重ですが、そうした展開のものが一つぐらいあってもいいのかなと、思っています。」

現在ラボのメンバーは約30名。近々5名増える予定で、臨床研究するには人数の規模に加え、ある程度研究を任せるこ

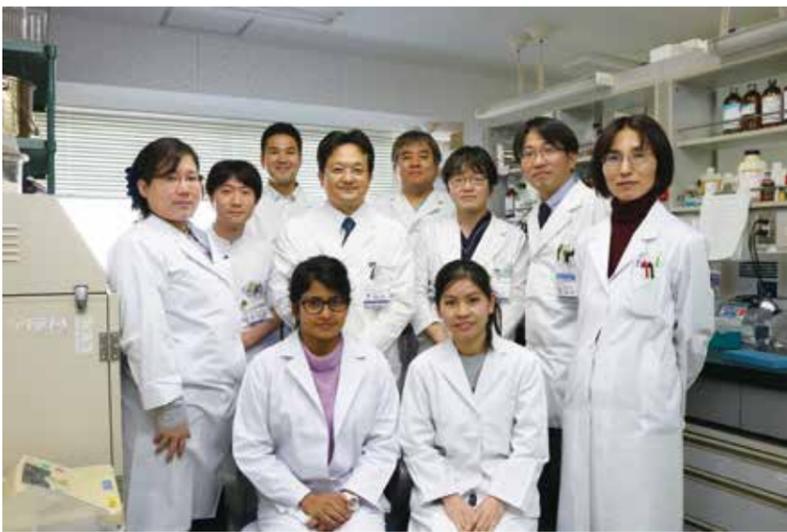
とができる人も必要といえます。メンバーの中には研究目的に全国から来県している先生が3名いらっしやるそう。「がんと比べて肺線維症の研究をしている人が少ないのと、間質性肺炎の基礎研究から臨床研究までしっかりとやっているところはないので、その領域で最先端のことができないラボと全国的に評価いただいているため、人が集まっている

人のために役立つものを 作りたい

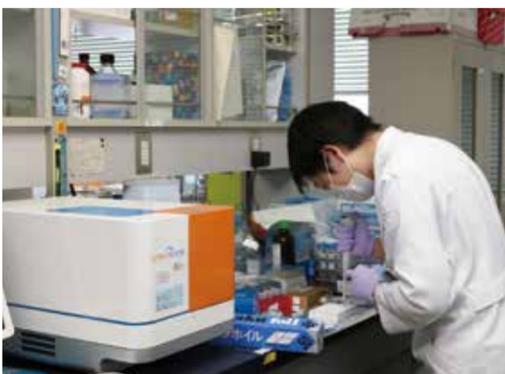
西岡先生が目指す「人に役立つ何か」のひとつに新薬の開発があります。新薬と聞いて思い浮かぶのは、イギリスで行われた新型コロナウイルス感染症のワクチン接種のニュースではないでしょうか。あのニュースを見て、製薬会社の頑張り次第では短期間で治療薬ができるようなイメージを持つ人もいるかもしれませんが、そう易々とできるものではないとい



肺線維症研究チーム。



がん免疫研究チーム。



撮影時、研究室の方はPCR検査の準備をされていました。写真左側はウエスタンブロットングを自動で行う機器。お値段、1000万円だそうです!

西岡先生は全国的に評価されている定年までの間に、何らかの成果を出して「患者さんに還元するような研究をしたい」という西岡先生。「そういう研究ができれば研究者冥利に尽きますね」と、お話いただきました。

西岡先生のラボでは2021年から肺線維症の薬の開発に協力して、大手企業と共に第Ⅲ相臨床試験に進むものがあるといえます。新薬の開発は通常、3段階の試験を経て行われ、第Ⅲ相臨床試験は標準的な治療と比較して、効果がどうかを調べる最終段階です。第Ⅲ相へ進むのは約6.5%という確率のレアケースですが、第Ⅲ相へ進んだからといって、完成間近と安心はできないといえます。「第Ⅲ相の段階でも副作用でうまくいかなかったり、やってみないとわからないことが多いですが、もし薬ができたなら徳島大学が開発に貢献した薬として、全国の肺線維症の研究者に認められると思います。」

キャリアが長くなると臨床研究への興味が沸き、大学人として研究している定年までの間に、何らかの成果を出して「患者さんに還元するような研究をしたい」という西岡先生。「そういう研究ができれば研究者冥利に尽きますね」と、お話いただきました。